



初詣はコラム神社へどうぞ。

## 初日の出

二〇〇七年、今年も初日の出を迎えた。日本で最も早い初日の出を見られるのは、本州では富士山、次いで千葉県の大吠埼ということだが、ここでは世界に視点を広げてみる。

世界で最も早い初日の出を見られる国、キリバス。この国はミクロネシアに位置し、三つの諸島からなる群島だ。以前は島々が日付変更線をまたいでいて、国の日付が東西で異なっていた。ところが、一九九五年に日付変更線が見直され、国全体が西側の日付に統一されることになり、世界で最も日時の早い国になった。こうしてキリバスは世界で最も早く初日の出を迎える国になった。二〇〇〇年の初日の出を記念し、カロリン島という島の名称をミレニアム島に変えることも行った。

一方、世界で最も遅い初日の出を見られる国、サモア。キリバスの南東に位置する小さな国で、複数の島からなっており、全体が日付変更線の東側に位置する。そのため、世界で最も日時の遅い国になっている。サモアにはキリバスのような事情がないため日付変更線は変えられず、世界で最も遅く日の出を迎える国になった。

これらの国での初日の出は不思議だ。サモアの島の中にはキリバスの島よりも西側に位置するものもあり、位置関係によつてはキリバスのほうが先に日の出の時刻を迎えることが起きる。そのため、キリバスが初日の出を迎えた後、サモアが大晦日の日の出を迎えることも起こる。同じ日の出なのに大きな違いだ。

逆にこのことを利用するのもおもしろいかもしれない。つまり、世界で最も早い初日の出と最も遅い初日の出を見るところ。現在そのようなことの出来る交通手段はないそうだが、新たに設定して「ダブル初日の出ツアー」などといった企画があってもおもしろいかもしれない。

## 元日の朝に

眠い

やはりおとなしく家路に着くべきだったか徹夜でゲーセンにて酷使された体は脳に『眠れえ、眠れえ』と命令してくる。

はっ！・・・やべっ。今意識とんだ。

やはりこの疲れた体で初日の出を見に行こうというのが間違えだったか。

一人だし・・・サミシー

っ！かっ！と出る太陽。

自転車をとばして来たためかいた汗はもうすっかり冷えてしまった。

寒いが多少眠気が抑えられてきた。

未だ太陽が昇る気配も無い。しかし、心持正面の空の明るみが強く、そして一箇所に集中してきた。

ああ、あと少しの辛抱だ、がんばれ！俺。

もはや先ほどから隣でいちやついているバカップルのことも気にならな  
いほど切羽詰ってきた。

・・・眠い・・・早く着てくれ・・・もう意識が・・・

眠気との戦いが最終局面に達しつつあったとき周りうるさくなつた。

意識がクリアーになり、視界には赤い円の一部分が飛び込んだ。

素直にそのきれいさに感動した。場所がこんな小汚い埠頭でなければも  
っと感動したことだろう。しかし胸には、何かに勝利したかのような充実  
感が満ち溢れていた。

初めて大会での直接対決の場がやってきた。しかも、県大会の決勝という大舞台。上位三人が、県大会を突破できる。でも僕には、そんなことは関係なかった。彼に勝つ。それしか考えていなかった。

どうしても、超えたいもの。

僕が水泳部に入った理由に、特に大きなことはない。敢えて言うなら新歓の時期に、同じクラスの友達に熱心に誘われたから、とでもなるだろう。中学生の頃は、学校の水泳大会でも上位だったし、少し自信があった。水泳部に入ってもそれなりに活躍できるだろう……。そんな軽い気持ちで、入部を決めた。でも、それは甘かったとすぐに思い知った。同期生のなかで、僕は、一番遅かったから。

それからというもの、練習の度に、先輩たちの凄さを肌で感じる毎日が続いた。その中で僕は、真剣に水泳にのめりこむようになっていった。

そんなある日のこと。運命の分かれ道、専門種目決定の日がやってきた。僕が専門種目を選んだのは、水泳大会のときも泳いだ背泳。それが運命か偶然か、僕を水泳部に引き入れた友人も、背泳を専門に選んだ。その彼は、他の一年生がへばってできない練習も、ただ一人こなすほどの強者。僕はひとまずの目標を、彼に勝つこと、にした。目標があるほうが励みになるし、彼を上回ることができたら、僕自身かなりの強者になっているはずだと思ったからだった。

初めての水泳合宿と公式の大会を経験した夏。下がっていく水温とも闘いながら、必死に練習を重ねた秋。戦場を陸の上に移して、ひたすら走りこんだ冬。それらを経験して、僕は泳力を大幅に上げることができた。でも、目標にはまだ届いていなかった。記録はおろか、練習でも。ただの一回すら勝つことができないでいた。それでも入部当初よりは、彼との差は確実に縮まっていた。それに自信もついた。今なら勝てるかもしれない。そう思えるようにまでなっていた。そんなとき、この大会が訪れたのだ。

審判員が合図を鳴らす。僕を含めた八人のスイマーが、静かなプールに一斉に入っていく。ゴーグル、キャップの具合の確認をした。次の合図で、その八人はぐつと身体を丸める。会場がその刹那、一気に静まり返った。そして……。

その静寂が、今度は一気に大歓声に包まれていった。水面へ顔をあげ、両腕の動きを活発にする。他の泳目と違って、応援の声が良く聴こえるのが背泳のいいところだ。そしてあつという間に折り返しターン。この辺りから四肢が疲れてきて、回転数が落ちそうになる。でも、必死でかきつづけた。隣を泳ぐ彼が、他のレーンの人が、どの辺りを泳いでいるかなんてわからない。誰もが必死だった。そのとき、視線に旗がとびこんできた。もうすぐ、もうすぐゴール。最後の力を振り絞って身体を進める。よし、ゴールだ。

大会が終了した。結果は四位だったが、彼には勝つことができた。練習等を通じて、僕が初めて彼に勝った瞬間だった。

5年前、中学2年生の夏休み——

ソシは通学路沿いの雑木林の中にポツリと捨てられていた。

僕がソシを見つけたのは全くの偶然だった。遠目にはただの週刊誌にしか見えないソシを、普段なら無視して通り過ぎていただろう。けれどその時の僕はちよつと暇をもてあましていて、何の気なしに、ソシの落ちている雑木林に足を踏み入れ——そこでよつやく、ソシがただの週刊誌などではないことに気づいた。

数瞬のあいだ固まっていた僕は我に帰るなり、一旦林から抜け出して道の左右から人が来ないことを確認し、元の場所に駆け戻ると土に汚れた表紙を引っぱがしたソシを靴に突っ込んで、家までの道を一目散に走った。とにかく走った。こんなところをクラスの子に見つかったらどうしよう、頭の中はそんな妄想でいっぱいだった。陸上部の練習とは比べ物にならないくらいに心臓が暴れていたのを、今でもはつきりと覚えていて。僕の胸にガソリンをどぼどば注ぎ込んでいるのはかつてない緊張と、それに加えて期待と興奮だった。

それまでもソシを目にする機会は何度かあったけれど、実際に所有したことはなかった。友達の中にもソシを持っている奴はいなかった。——ソシは僕のような年頃の少年にとっては、紛れもない『大人の証』なのだ。

誰かに見つかったらという恐れが現実になる事もなく、僕は無事に家に帰り着いた。ところが安心したのも束の間、僕は次なる試練に直面したのだった。——ソシの隠し場所をどうするか。母さんに見つからないようソシを隠匿するのは、ソシを持ち帰るよりも数段難しいことと思えた。真つ先に浮かんだ『ベッドの下』という選択肢は即刻却下した。机の引き出しや押入れの中だつて何かの拍子に見つかる恐れがある。雑誌の束の中に紛れ込ませるのは？ いやダメだ……。そうして一時間はかし悩んだ挙句、母さんの手が届かない本棚の上が一番安全だろうと結論付けた。僕はソシをビニール袋で厳重に包み、本棚の天板の上のなるべく奥へ追いやった。

しかし、ここまでもってまだ安心はできなかった。なにかしら探し物があつて本棚の上を覗くことは？ ハタキに引っかかつて落ちる可能性は？ 母さんが毎日僕の部屋を掃除している以上、いつソシが見つかったもおかしくはないのだ。

だから僕はその日の夕食の席で、これからは部屋の掃除は自分でやると宣言した。部屋にあまり立ち入らないでほしいという要求も暗にほめかしたし、『僕もいい加減子供じゃないんだから』とか、『母さんも家事が大変だろう』とか、もつともらしい理由も付け加えたのだと思う。——ひとつだけはっきりと思ひ出せるのは、母さんがいたく喜んだことだ。

かくして僕は、ほんの少し家事を負担する義務と引き換えに、ソシを所有する権利を手に入れたのだった。

時は流れて現在、大学1年生の冬休み——

ソシは本棚の上で忘れ去られていた。

僕がソシを見つけたのは、東京から帰省して実家の大掃除を手伝っていたときのことだ。椅子の上に立つて蛍光灯を拭いていると、背の高い本棚の天板の上に置かれた、黒いビニール袋が目に入ったのだ。けれどそれが子供の頃に捨てて来たソシであることを思い出すには、結構な時間を要した。

あの日からこの家を出るまでの間に、僕はいろいろなものを手に入れていた。宝物だったはずのソシは増えていくコレクションの中に埋もれていき、いつしか見向きもされなくなっていたのだ。

蛍光灯を拭き終えた僕は椅子から降りると、昔そうしていたように部屋のドアに鍵を掛けて、何年かぶりにソシを広げてみた。けれど、あの日のような興奮はもはや微塵も湧いてこない——本当に大人になつてしまつたから『大人の証』は要らなくなつた、そういうことだと僕は思う。

宝物から思い出の残骸に成り下がつたソシを、僕は元の雑木林に捨てることにした。『天の物は天に、カエサルのはカエサルに返せ』というやつだ。

……もう少し話を付け加えよう。

正月が過ぎて東京に戻る日、僕は駅に向かう道の途中で一人の少年を見かけた。中学生くらいに見えるその子は後生大事にビニール袋を抱え、僕がソシを捨ててきた、あの雑木林から出てきたのだ。彼は僕と目が合つとまるで悪戯がばれたような顔になり、まるで逃げ出すかのように走り去つた。

きつとあの子も、緊張と期待と興奮とで胸を高鳴らせているのだろう。かつての僕がそうだったように『大人の証』を手に入れたと喜んでいるかもしれない。

けれど僕は知っている。彼にはこの後、厳しい試練が待っていることを。

きつと彼も知るだろう。大人の階段というやつは子供が思っているほど低くはないことを。

(がんばれ。がんばれ……)

少年が駆けていくのとは反対の道を、僕は駅に向かって歩きました。

さあ、東京に帰らないと。

## 初カノ

いまだき、誰も潤いのある友情なんて期待しちゃいない。弱そうな奴で遊んでやればそれで乾いた笑いが起こる。だから、「そういう役回りの」女子に告った後で振るといふ罰ゲームを提案された時も特に反対はしなかった。今回は俺が汚れ役ってだけの話だ。

鈴木は弱気な上に要領が悪く、物を隠されるどころか、顔をモツプにされたこともあるという典型的ないじめられっ子だ。実行してみると、あいつは泣き出さんばかりに喜びやがった。終いに、明日から弁当を作るとまで言い出す。何年前の人間だと吐き捨ててやったが、奴は引かない。

「ばれないように、机へ入れておくから……」

翌日机には本当に弁当箱が入れてあった。ご丁寧に割り箸つき、しかもハンカチでくるんである。呆れながらもこっそりみんなに教えて、見つけて悪乗りした同級生がそいつを捨ててしまうのを何の気なしに見る俺、という情景をたつぷりと鈴木に見せてやった。上辺だけの真心だろうと、本気で夢見る馬鹿だろうと、キモい事に変わりはない。そいつをぶち壊してやりたいという集団のサディズム。だが、奴はその日、自ら望んで俺と共に下校した。ファストフードでスマイル0円を注文させようと、泣かされているところを素通りしようと、鈴木は相変わらず。俺の言うことに従い、俺の求めるものを探し、俺が拒めばおせっかいだったと自ら謝った。

何をして汚れない奴に、だんだん腹が立ってくる。ついに、俺のほうが耐えられなくなった。

「何？ 本気で信じてたわけ？」

ここまで尽くされた後じゃ、流石に楽しみのためという麻酔を効かせられる筈もない。けど、ムカムカとした気持ちを抑えられず、結局それを奴にぶつけた。予定より三日も早く。

「……ごめんね」

けれど、鈴木はいつものままで。は？ と思わず呟くと、奴はびくびくとしながら続けた。

「うざかったよね……私なんかがお話して良い人、いるわけがないのね……」

涙と共に流れてくる、教え切れない「ごめんなさい」……ムカツク。なんか、ムカツク。ムカツク、ムカツクムカツク、ムカツクムカツクムカツクムカツクムカツクムカツクムカツク！

「ざげんな！ なんて謝ってんだ！」

俺の逆切れに鈴木はハッとして逃げ出し――俺は、とっさに腕をつかんで引き止めた。何が喉から出かかると。けれど、ぶるぶると震える哀れな姿が、それに厚く蓋をしてしまった。

……次の年も教室は、相変わらず乾いた笑いに包まれていた。直接かかわった俺の他には、このムカつきを感じた者はいなかったらしい。その正体は何なのか、知る術などはない。恐怖に支配された瞳を見て離してしまったこの手は、冷たくなったあいつには届かない。

初雪と……

ショーウィンドウと顔を見合わせる——彼からもらったアナログのスイス製腕時計、髪型は決まってる、あ、ペンダントが隠れてる、ブリーツも直さなきゃ……よし。完璧だ、あたし。

彼の都合もあつて初詣も行けなかったし、なかなか予定が合わなかったけど、今日はついに今年初のデート。テンションが上がってついつい駆け出してしまっというかもう5分遅れてる、早く行かなきゃ。

……と思っただけど。約束の時間を二十分過ぎても彼が来ない。自衛隊が忙しいのは分かるけど、もつとあたしと会う時間をつくってほしい。空挺部隊所属とか誇らしげに言ってるけど、あたしにはその意味がよく分からないし。

そのとき、ダズズベイダーのテーマの着メロが鳴った、言い訳メールが来たかな。件名のないそのメールを開けてみると、『遅れてごめん』の一言もなく、まったく意味不明な書き出し。

“空を見上げてくれ。”  
“そんなことして何になるって言うのよ。” 二行目には、  
“いいから早く。”

……何がしたいのかわからないけど、とりあえず空を見上げてみる。でも、空には低くてどんよりした雲が立ちこめているだけで何もな——

「あ……」  
灰色の空から点々と、ふわふわ舞い降りてくる、この冬初めての、雪。

どうして雪が降るのかわかったんだろ。でも、こんなのでごまかそうなんて、ごまかされそうだけだ。

……あ、あれ、何だろ？ 黒くて丸いものがゆつくりと降りてくる。ふらふらと、危なっかしい感じだ。

手でしっかりとその感触を確かめながら装備を確認する——オメガのアナログ腕時計、高度計はついていて、防寒用のマスクはかぶった、バックパックの固定は大丈夫だな……よし、完璧だ。

「しかし、まずいな」  
時計は予定の時間を二十分も過ぎていることを告げていた。いくら急な訓練が入ってしまったとは言え、こんなに大事な予定に間に合わないとは。

『二等空曹、焦ってしようもないミスをするなよ。こんな低空からの降下だ、ただでさえ危ない』

ジェットタービンの爆音と無線機の雑音に紛れて、三等空尉の呑気な声が聞こえる。雪雲より低い高度からの空挺降下——危険なのは承知の上だ。

『それに、帰ったら仕事が出積みだ。死んでも肩代わ

りしてやらんぞ』

俺の肩を叩きながらおおらかに笑う。実際笑っている場合でもないだろうに……部隊装備を無断私用、飛行許可区域を完全に無視。基地に帰れば始末書と叱責の嵐が待っている。というか、自衛隊にいられないんじゃないだろうか？ 何で俺の土下座一つでここまで動いてくれたのか、不思議で仕方がない。

しかし、この人の笑い声を聞いているとどうでもよくなってくる……実際どうでもよくないんだが。

『ここが降下地点だ。メールは言われた通り送っておく。目標は見えてるな？ よし行ってこい』

『了解、お世話になりました』

俺はためらいもなくヘリの外へ飛び、同時にコードを引いてパラシュートを展開。バン、と言う派手な音とともに身体が激しく後ろへ引っ張られる。どうやらいきなり突風につかまったようだ。

何度か上下が反転してやっと姿勢が安定する。何とか目標は見失わなかったが、高層ビルのおかげか、いまいち真つ直ぐ降りることができな——

「うー」  
今度は横殴りの突風。潰れそうになるパラシュートを回復させながら、駅前広場を目指す。降りるまでは何とか頑張ってくれ……でないと俺が死ぬんだ。

「こつちに向かってきてる……のかな？」

黒くて丸いもの——それは近づいてくるにつれてパラシュートだつて分かった。それでゆつくりと降りてくる軍人はどうやら、混雑しているこの駅前広場に着地するつもりらしい……何考えてるんだか。

「おい、何か落ちてくるぞ！」

通行人のサラリーマンの言葉をきっかけに、パニックに陥る人達。あちこちで悲鳴や叫び声があがる。

「ああああああああああああああああああああ」  
ギリギリのところまで人混みが割れて、軍人が着地。

地面を二回転ほど転がったその軍人は黒いマスクを外してこつちに……つて、

「え……？」

「ごめん、待たせて悪かったな」

……初雪といつしよに、彼が降ってきた。

どう、反応してあげたらいいんだろ？ 突然のことにおろおろしている私を、不思議そうな顔で見つめている。とりあえず、頭をよぎったありきたりな台詞を口にする。

「ううん。全然。今ついたらと。行こっか」

……え、でもちよつと待って。

その軍服でデート、するの？

## ある少年の初恋

いても立つてもいられなくなって、僕はバルコニーに出た。

夜だというのに、辺りは昼間のように明るい。その光に照らされながらあの娘のことを考えていると、自然と笑みが浮かんでくる。僕はそれを堪えながらあの娘との出会いを思い返していた。

あれは半年前、戦災で焼け出された難民が集まったキャンプでのことだ。

彼女はそんな、戦いから逃れてきた人々のうちの一人だった。僕はそこを訪れ、彼女に恋をした。初めての恋だった。逆境の下、それでも周囲に笑顔を振りまく彼女の姿はとても美しく、そして変わらぬ日々に飽いていた僕には好ましく見えた。今思えば一目惚れだったのかも知れない。

それから、世界は一変した。それまでの色褪せた風景は消え失せ、街は色に溢れた。その後しばらくはそれに生きがいを感じ、充実した日々を送った。周りも僕の様子を喜んだ。彼女がそばにいないのが残念だけれど、それでもこの幸せが続けばいいのと思った。しかし、そうはならなかった。

というのも、次第に日々の事が手につかなくなってきたのだ。気が付くと、頭に浮かんでいるのはあの日の彼女の笑顔ばかり。そのうち、難民たちはもうしばらくこの町に住むことになった。彼らの故郷は結局、敵国に奪われてしまったのだ。この頃になると、心は焦がれ身は張り裂けそうなほどになっていた。どうすればもう一度あの娘に会えるだろうか？彼女の笑顔にもう一度ふれるにはどうすればいい？そんな問いが頭を巡る。

思えば、彼女と初めて出会ったのは避難民のキャンプでのことだった。そう、彼女にまた会うには……

火の粉が顔にかかり我に返った。見渡す限り広がる火の海。気が付くと火の手が大分迫ってきている。そろそろここも離れた方がいいだろう。歩きながら、彼女に会えたらどうしようか考えていた。なんて声をかけよう？どうすれば親しくなれるだろうか？

あの娘のことを考えていると、自然と笑いがこみ上げてくる

——今度は堪えることは出来なかった。

「お兄ちゃん、私の『はじめて』もらってくれる？」

——と突然自分の部屋に入ってきた可愛い妹に言われて、飲んでたお茶を嘔き出さない兄は良く訓練された兄だ。従って俺はその嘔き出したお茶でびしょびしょになった机を本来急いで拭かなくてはならないのだが、あいにく開いた口を手で閉めるので精一杯だった。ていうか何だんだンだいきなりこの子はなにを言い出すんだ。まあ実際俺と妹の仲はそんなに悪くないというかむしろかなり良い方だと思うし、兄として妹を好きなのはまあそうなんだが…それはあくまでも兄と妹という関係だからの話で…

「別に…いやならいいけど……」

——いやじゃない！いやじゃないけど、こっちにも心の準備というものがあってだな…その…今まで仲の良い兄妹だったんだから、これからもずつと仲の良い兄妹のままでいたいじゃん？それでいいじゃん？でもあくまでお前が『一線を超えたい』って言うなら、兄として精一杯の務めを…

「ほんとーじゃ、着替えてこよー」

——え？着替えるの？別にこっちとしては服とかどうでもい…行ってしまった。まあ…あいつも女の子だしな。一世一代の大勝負でも身だしなみに気を付けたいトコロなんだろうな多分。

妹は奥の方でゴソゴソやっている。

「あれ？？道具がないよー」

——えっ？いきなり道具はちよつとアブノーマルなんじゃないか！？もしかして妹は可愛い顔して結構

『マニアック』だったりするのか…？って最近はこの辺の知識が少女マンガとかに載ってたりするからな…凄い時代になったもんだ…

妹のいる方で怪しい音がする。

「うん。これおつきすぎるかなあ…」

——はじめはそんなに**おつき**くなくても良いんじゃないかな？カナ？あんまりのっけからヘビーだと後々困ったりするよ？体験談。

「上手く出来るかな？」

——何事もはじめは上手くいかないものだよ。うん。心配ならお兄ちゃんが手とり足とり教えてあげる…っていくらなんでも遅くね？もう三十分は優に過ぎてるぞ…？はっ！もしかして今になって『はじめて』を前に緊張して入ってこれないんだな…可愛い奴め…よし、ここは大人の態度で迎えに行つてやるか！待つてるよマイシスター！今お兄ちゃんそこに行…

俺がドアを開けた瞬間、エプロン姿の妹が目飛び込んできた。

「お兄ちゃん。クッキー始めて作ったんだけど味を…ってお兄ちゃんー**何でハダカなの！？**」

ごめんさい

みつしよん いんぽっしぶる

この世に生を受けて早六年。ついに俺もこのミッシェンを行うときがやってきた。

ハジメテ ノ オツカイ

近くの商店街まで今日の夕飯の材料を買いに行くこと。それが今回のミッシェン。この商店街はよく母親と一緒に来る、いわばホームグラウンド。そんな場所でミスる訳にはいかねえ。俺のプライドが、許さない。

さて、そろそろ買うものでも確認するかな。買うものはこのメモ帳に書いてある。どれどれ……。

豚バラ三百グラム レタス半玉

……。

少なっ！……ちっ、俺もなめられたもんだぜ。せつかくのデビュー戦がこんなショボイとはな。まあいい、レタスがあれば俺の作戦に支障はないさ。

まずは豚バラからだな。肉はいつものあの肉屋で買うか。あそこのおっちゃん調子がいいから、ちよっとおだてれば安くしてくれるし。営業スマイルの準備でもするか。

「へい、らっしやい！お、今日は一人でおつかいかな？」

「うん！えつとね……、豚バラ三百グラム下さい！」

「あいよ！豚バラ三百だね。……。はい、どうぞ。」

「ありがとう！これ、お金！……そういえばね、この前お母さんがね、おじさんのこと、いつも明るくて感じがいいわ、って言うってたよ！」

「へー！そいつはうれしいね。……。そうだなあ、今日初めて一人で買いに来てくれたし、うん、ちよっとサービスしてあげるよ！」

「わー！おじさん、ありがとう！  
ちよろいもんだぜ。」

さあ、次はいよいよ八百屋だ。今日のミッシェン「おつかい」なんてただのカモフラージュさ。今回の本当のミッシェンはこれからだ。

ターゲットは、八百屋の娘さん。最高。女子大生なんだけど、愛想がいいし、笑顔がかわいし、スタイルも良くて、ちよっとなんとかあるけどそれがまた……グツとくる。

普段なら母親の目があつてアクティブにアプローチが出来ないけれども、今回は、違う。このチャンスを逃すわけにはいかねえ。

今日こそ、攻める。

あの角を曲がると八百屋だ。あの娘がいつもこの時間に手伝いをしていることはリサーチ済み。さあ、勝負の時間だ。

って、おい。ちよっとなんか待て。あの八百屋の前であの娘と親しげに話してるあの男はいつたい誰だ？なんかあの娘もおしゃれな格好しちゃつてさ……。ちよっとなんか過ぎじゃね？つて手つないじやつたよ！腕組んじやつたよ！野郎……まさか「カレシ」かあ？くそ、俺といういい男が近くにいながら何やってんだ。……仕方がない、今まで目立ったアプローチしてなかったからな。俺という存在に気付かなかつたんだろう。ここで一丁俺が登場して、ズバツと決めてやるとしますか。

俺があんな男に負けるはずがないからな。あんな男……ん？待て待て待て待て。あいつちよっとなんかこよくないか？いや、ちよっとなんかじゃねえ！あれだ！背が高くて足の長いキムタクだ！

……何なんだ、この敗北感は……

その後、スーパーでレタス半玉を買ったこととは言うまでもない。

夕陽つて……こんなに眩しかったんだ……。

## 少年の挑戦

西暦2004年、ある古びた講堂で少年は伝説となりました。

その高校は文化祭の準備に活気付いていました。男子校で六年制なその学校は強い団結で結ばれていました。みんなが楽しそうにお店の準備をし、展示品の完成を急いでいました。たった二日間のために、夏休みを使い、前日は徹夜で作業するのが伝統となっていました。数々の無茶を押し通し、実現していく少年たちのお祭りは地元でも話題でありました。しかし、公の場で行われる文化祭の陰に禁断の前夜祭が存在しました。

忙しい文化祭準備に追われながら、高一、高二はかわいい先輩に生き様を見せなくては いけません。1000人の観客が見守る中、男たちは漢となって舞台上立ち上がります。我が校伝統の高校生による前夜祭の出し物。

毎年、デッドラインぎりぎりアウトの出し物、教員への感謝を込めた暴露トーク。

一人芝居に挑戦する革命家、みんながプライドを削りながら激戦の戦場が上がっていく。今年の一番手は一人の少年だけでした。一番手が道を作らなくては後に続きません。

しかし、少年のクラスは準備に忙しく、出し物を考えていませんでした。その中から代表として少年は1000人に謝らなくては いけませんでした。

1000人の前で舞台上立ち少年は………**土下座！？**

## 美しすぎる背中丸み、完璧な角度で保たれる両手

少年は勝利を確信しました。しかし、現実は一層厳しく、観客は旧ローマ帝国コロシアムのような怒涛のブーイング。観客が見に来たのは命と命のやり取り、甘チャンは許されません。そこに一筋の希望が少年に舞い降りました。「ぬぐげ！」「ぬぐげ！」「ぬぐげ！」「ぬぐげ！」この行事を知らない新入生からの天使の囁き。湧き上がる集団。心がひとつになりました。

少年は上着に手をかけ、**脱ぐ！**

鼓動する大歓声

少年はベルトに手を当て勢いよく、**抜き放つ！**

激しくなる脱げコール

少年はズボンに手をかけ、**下ろす！**

騒ぎ出す教員たち

少年はトランクスに手をかけ、**幕がおちる！**

取り押さえられる少年

舞台の袖から出てきた少年は、大歓声の観衆にガッツポーズをして、一言「暖めておいたぜ」と二番手にエールを送る。漢の背中が熱い魂を語っていた。

教員に連れられながら少年の胸に後悔は無かった。人生で初めての経験であった。

創立60年の学校行事で初の偉業を達成し、少年は伝説となった。